

ニッポン ドクター和の 臨終図巻



兵庫・尼崎でも桜のつぼみが綻(ほころ)び始めました。コロナになる前までは、在宅患者さんとお花見大会をするのが毎年の恒例行事でした。

「桜が咲くまで頑張ってる生きようね」。患者さんにそんなエールを送ることもあります。花見を目標に元気を取り戻す人もいます。命の終わりが見えると、桜の季節は格別いとおしい。しかし、コロナによって3度目の花見の中止を余儀なくされ、悔しくてたまりません。

「世の中にたえて桜のなかりせば」。在原業平の歌をタイトルに、終活を題材にした映画がまもなく公開されると知り、楽しみにしていたのですが、その

西行の歌を彷彿とさせる幕引き

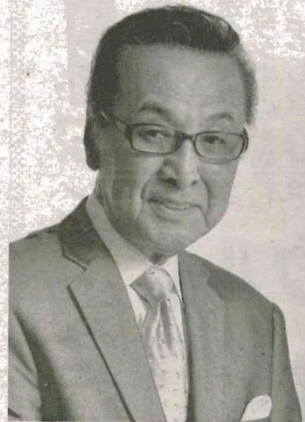
主演を務めた俳優の宝田明さんが3月14日に都内の病院で死去されました。享年87。死因は誤嚥性肺炎との発表です。

宝田さんは3月10日にこの映画の舞台挨拶に車椅子で登場。その様子を動画で拝見しました。変わらずダンディーで姿勢もいい。ユーモアあふれるトークで会場を沸かせていました。だいたいお痩せになられた印象でしたが、余命数日の人には見えません。

247 俳優 宝田明

翌11日は、雑誌の取材で3時間以上終活について語られたそうです。しかしその夜、腹痛や発熱などの体調不良を訴えます。12日午前緊急搬送され肺炎と診断。そのまま入院となりました。この時は会話ができなかつたようですが、「いつ退院できるのか」と筆談で周囲に訊いていたそうですから、意識はハッキリしていたのでしよう。しかし13日深夜に容体が急変。日付が変わり、14日の零時半頃に帰らぬ人となりました。直前まで元気に活躍されていたため、テレビや新聞には「急逝」と見出しが躍りましたが、では宝田さんは突然死なのでしょうか？ そつではないとお見受けしました。

誤嚥性肺炎には、本人も気が付かないまま進行する「不顕性(ふけんせい)」病態があります。食べ物や唾液を誤嚥しても、咳嗽(げっ)反射(ムセ)ることで弱いまま気管内に誤嚥物が溜まることで肺炎に至ります。加齢や脳卒中の後遺症、パーキンソン病の人にリスクが高く、老衰の中にある肺炎とも言えるでしょう。



宝田さんは、先の3月11日に受けた雑誌のインタビューで、「自分はまだまだ動かなくてはならない身なので、終活のことはそれほど意識していません」と語っておられました。最期まで第一線で仕事をされ、死の予感も、延命治療もなく、桜が風に舞うようにして旅立たれた。願わくは花の下にて春死なん。西行の歌を彷彿とさせるよつなほれば、人生の幕引きです。

長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が「平成臨終図巻」として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。